って、やがて文学を誘ひだす形を示してゐる

と云われるが、こうした受け取りは右の評の大体のパターンであった。右の云い方には叙事的なものが個的抒情主体に統括されてある状態が示されている。叙事詩というのは抒情主体から真直前方にある。即ち叙事詩は抒情の対極なのである。だから享受主体（抒情詩人）に重点をおくか、作品（叙事詩）に重点をおくかによって評価が異る。折口氏風に云えば〈既にその歴史を失って→文学の領域に入る〉という、作品と享受の二重性がある訳である。とにかく抒情詩（文学）とみられる歌には告発性が少ないことは事実である。こうした叙事から抒情への幅が、東歌をして一様に解釈させてくれない障害をなす訳である。

結

第三の言語の一つの特徴を挙げると、それは告発と救済を共に可能にする言語なのである。そしてこうした言語表現を共有する人々だけが真の共同体と云えるのであろう。この第三の言語を、もっとも文化的な学問的記号で説明するには矢張り一つの限界があろう。実に論文という第一言語をもってしては、第二言語表現も第三言語表現も説明不可能なのである。何故なら、それらは違ったものとして在らしめられたからである。

釈教歌の源流

針原孝之

一　序

万集には神事関係の歌がおよそ二百七十首ある。神祇歌としても部立があり、生活の場において詠まれ、人間の感情として表現されて、かなり宗教意識があったと認められる。しかし、仏教について見ると、釈教の部立が見あたらないのである。しからば、万葉集に仏教の影響がないかを考えると、そこに問題が出てくる。市村宏先生は「万葉集と仏教」（『万葉集新論』）と題し、万葉集には、仏教の影響がかなりあったと論じられている。これに対して、山田孝雄博士は、昭和二十八年十月九日、愛知県商工館ホールで「万葉集に仏教ありや」と題し講演なさった折に、「仏教史上最も隆盛だったといふ時代に、仏教の影響の甚だ少いことを不思議に思っている」と述べられているし、亀井勝一郎氏は「万葉集への影響について」（『古代智識階級の成立』）の中で、

万葉びとは、仏教信仰に関する限り、絶対に歌はないのである。四千五百余首の中に、信仰を直接歌ったものは一首もない。尤も大伴旅人・山上憶良・大伴家持、その他数人の歌の中に、あきらかに無常観の影響をうけたとみられるものが若干はある。しかし讃仏歌とか、釈教歌とか、熱烈な信仰告白、求道を歌ったものはない。少くとも信仰の本質的なものは歌はれていない。

と述べておられる。山田、亀井両氏に市村先生は反論されたのであるが、これは仏教的な色彩をおびた歌を判定する基準が述べられなかったために、両者の間に違いが出てきたようである。

私は万葉集において、仏教的色彩をもっている歌を釈教歌と名づけたいのである。従来、万葉集において仏教的色彩の少ないことが指摘されているので、釈教歌ということばを使用することは、適当ではないかもしれないが、以後万葉集の釈教歌について私見を述べ、概念規定をしたいと思う。釈教ということばをはじめて見ることができるのは、後拾遺集である。

二、釈教歌の定義

何故に、万葉集の中で仏教に影響のある歌をかなり見つけ出しておられる三氏（山田博士22首、亀井氏7首しかし20余首といっておられる。市村先生33首）が、立場を異にされたのかを考えるのである。今、釈教歌の定義について先学の説を見ると、『広辞苑』では

(1)経文などの事を詠んだ歌。または広く仏教思想に基づいた歌。

(2)「後拾遺集」以後の勅撰集の部立の一。『和歌文学大辞典』では、

信仰の表白や人生観の吐露のみでなく、その教義や経文の意味などまで和歌に詠みこむことは、拾遺集にまず現われ、「発心和歌集」のように専集すら編まれるほど、西暦一〇〇〇年前後から盛んに行なわれた。公任や赤染衛門の家集に既に少なからず見えるが、まだ名目は立てられておらず、後拾遺集が雑の部を更に小分して〈釈教〉の部を設けたのに続いて、「散木奇歌集」が〈釈教部〉を立てたのが、多分部名を定めた初めであろう。「久安百首」が〈無常〉とは別に〈釈教〉の題を置いてそれに五首を宛てる例を開き、続詞花集は〈釈教〉の部に初めて一巻全部を当てた。が〈釈教歌〉が一巻の部名として定まったのは千載集からで、事実として釈教歌が生まれてからその名が定まるまで、実に二〇〇年を要した。―以下略

とある。『和歌文学大辞典』の説明が辞典類の中で最も詳しい。『大言海』『大日本国語辞典』などはほとんど説明されていない。また大正大学の山田昭全氏（豊山学報「経旨歌の成立」）の説を引用すると、

いわゆる経旨歌・仏事法会に関連して作られた歌、仏教的思想感懐を表現した歌等を指して普通釈教歌と呼んでいる。

と述べられ、さらに釈教歌の概念規定を次のように広狭の二義に分けておられる。

㈠　経文又はその中の一句、或はよく流布された仏教用語等を素材にして、その大意や意味や連想された観念等を歌にまとめた経旨歌と、仏事講会等に因んで発想された歌。（狭義の釈教歌）

㈡、㈠をも含めて、特定の素材や発想契機をもたず、自由な立場から仏教思想や仏教的感懐を述べた歌全部を指す。（広義の釈教歌）

と述べておられる。その他、従来の釈教歌定義について見ておくと、

坂口玄章氏は「仏教文学序説」で

釈教歌は経意・経文によって讃歌・述懐乃至は講会・仏日に関する歌を蒐めたもの、

織田得能氏は「釈教和歌解題」で

経論章疏の意を詠めるもの、並びに其事となん思はるゝ歌。

福井久蔵氏は「釈教頭につきて」で、

諸経論の要文を詠じたものは釈教和歌の中心をなしている。

と述べられている。諸論の中で山田昭全氏の説が最も妥当であると思われる。

三、山田氏・亀井氏と市村氏の論争

万葉集における仏教の影響の有無は、どうやら三氏の釈教歌の定義ともいうべき、概念のとらえ方に問題があるのではないかと思われる。各歌の作品を詠み、釈教歌として意識する限界をどこにおいて断をくだすかは、むずかしいのである。

山田孝雄博士は三十二首、亀井氏は（二十余首あるといわれるが実際の例証歌は）七首、市村先生は三十三首の例証歌をとりあげておられる。これら三氏の他に、釈教歌詠全集にとられている万葉時代の釈教歌、十八首を参考にして整理してみると別表の通りである。

万葉集の中から、仏教的色彩のある歌を選んだものであるから、統一された所があってしかるべきだと思う。また選者の主観性、個性が現われていて興味をひくのである。しかし、亀井氏の例証歌が少ないことは遺憾である。四者がすべて選択したものは、わずか次の二首である。

沙弥満誓歌一首

三五一　世間乎　何物爾将レ譬　且開　榜去師船之　跡無如

臥レ病悲二無常一欲レ修レ道作歌

四六八　宇都世美波　加受奈吉身奈利　夜麻加波乃　佐夜気吉見都

々　美知乎多豆禰奈

この他、三者が選んだものは九首、二者が選んだもの十二首で、二者以上選択の歌は合計二十三首である。四者の中の一人のみによって選択されたものは、三十一首ある。一人だけの提案といって軽視してはいけないのであって、そこに各々の理由がある。

二者以上に選択された二十三首の仏教的色彩をおびている歌について、巻ごとに分類してみると次のようになる。

巻三に四例、巻四に一例、巻五に四例、巻六に一例、巻七に二例巻八、十一、十二、十三にそれぞれ一例、巻十六に三例、巻十七、十九に一例、巻二十に二例を数えることができる。沢瀉久孝博士の『万葉集新釈』の解説によれば、これらの巻々の制作年代を推測することが出来て、後期万葉の時代に、仏教的な色彩のある歌が詠まれたといえる。

共通点を持つこれら三氏の例証歌について問題は少ないと思うが、一人のみによって選択された歌について検討されねばいけない。

先にあげた山田孝雄博士の言を引用すると、「本当に仏教の教義や教理、若くは信仰といふものを詠んだものは数が少ない」と述べられているのは、山田昭全氏の定義される釈教歌の狭義の意味として理解できるのである。さらに亀井氏は、

万葉びとは、仏教信仰に関するかぎり、絶対に歌はないのである。四千五百首余首の中に信仰を直接歌ったものは一首もないと

	山田孝雄氏	亀井勝一郎氏	市村　宏氏	釈教歌詠全集
二六四			○	
三〇八	○	○	○	
三四八				○
三四九			○	
三五一	○	○	○	○
四一二				○
四一五				○
四四二	○	○		○
四六〇	○			
四六一	○			
四六五	○	○		
四六六	○			
四七二	○			
五四一	○		○	
六〇八			○	
七九三	○		○	
七九四			○	
八〇三			○	
八〇四		○	○	
八〇五			○	
八八八				○
八九九			○	
九〇〇			○	
九〇二			○	
九〇五			○	○
九〇六			○	○
一〇四五	○		○	

述べておられる。しかし次の四一二番歌は釈教歌とみなしてよいだろう。

市原王歌一首

	山田孝雄氏	亀井勝一郎氏	市村　宏氏	釈教歌集全集
一二六九	○		○	○
一二七〇	○		○	○
一四四二			○	
一四五〇	○			
一五九四				○
一五九五	○			
一六三五	○		○	
一七八五	○			
二五八五	○		○	
二九九六	○		○	
三二六五	○			
三三三二	○		○	
三七八八	○			
三八三一	○			
三八四九	○		○	○
三八五〇	○		○	○
三八五三	○		○	○
三八五六				○
三九五八			○	
三九六二			○	
三九六三	○		○	○
四一六〇	○	○		
四一六一	○			
四一六二	○			
四四六八	○	○	○	○
四四六九	○			○
四七〇			○	

四一三　伊奈太吉爾　伎須売流玉者　無レ二　此方彼方毛　君之随意

この歌をどのように処理されるのであろうか。四一二番歌は釈教

歌詠全集にもとられ、次のような註を付記している。

これは法華経安楽行品に、唯髪中明珠、不二以与レ之、所以者何、独王頂上、有此一珠、若以与レ之、王諸眷属、心大驚怪によりて詠める。経旨和歌の最も古きものゝ一つなり。

また、市村先生は、

亀井氏が当時の仏教を眼の仏教としたのは、この頃の仏教が未だ日本人の精神内容をなさず、工芸美術にのみ大きく影響して、万集葉の作品などには影響が極めて稀薄であったという発言である。私は以上のように万葉集中の仏教に関連のある作品を一つ一つ採り上げてみて、その数も四五一六首の総数に比べては僅少ではあるが、仏教という外来宗教が日本の抒情詩たる和歌に及ぼした影響としては、必ずしも少しとしないものがあったと思うし、無常をいいながら延命を願うのは当時の仏教の現実的なあり方であって、無常を観ずれば家を捨て山に隠れるというコースをとるには至らなかったのである。（中略）……われわれの考える仏教と奈良時代の仏教を同一視して、影響を考えるべきではなかろう。寺院の建立や大仏の鋳造に国力を傾けたのも、この国土をそのままに浄土たらしめようとしたのであって、死後の救済を主としたものではなかった。（中略）……万葉集における仏教の影響は必ずしも乏しとせず、過大視せぬ限りむしろ相当の影響があったとみるべきであろう。

と述べておられる。このようにみてくると、山田・亀井両氏は狭義の釈教観を持っておられるのに対して、市村先生は、広義の立場から仏教的色彩のある歌を万葉集より抽出されたために、違いが出てきたのだと思う。

四、釈教歌の芽生え

津田左右吉氏は『文学に現われたる我国民思想の研究―遣族文学時代―』の中で、次のことがらを指摘しておられる。

㈠楽観的の我国民の性情が根本であること。即ち現世を悪と見、生活を苦と観じ、一切を無常とみる仏教思想はこの国民の性情には不適当であったのである。

㈡祈禱教として栄えた仏教は、皇室国家によって保護奨励されたもので、一般の風俗となり信仰となって日常生活にまで行きわたることはなかったのである。

㈢総て我が国の歌は、私人的感情を述べるものであって、公共思想とは没交渉であるので、その題材としても公共的事業である仏教を採り入れることは少ないのである。

㈣宮殿楼閣の美について一言もしなかった当時の歌人であるから仏教の宏壮はいささかも万葉歌人の眼に映じなかったのである。

久米常民氏はこの中で、特に㈠・㈡の論拠が重要であり根本的なものとされる。釈教歌の成立を一時に考えないで、無常観の歌がしだいに仏教的色彩を多く含むようになったと考えたい。さらにいえば無常観思想の進展したもの、またはその頂点に達したものを釈教歌と名づけたいのである。それゆえに、万葉集において無常観・述懐・悲哀感のある歌に仏教的色彩を感じるものを考察していかねばならない。今、仏教用語を使用している歌を抄出してみる。

笠女郎が大伴家持に贈った

六〇八　不二相念一　人乎思者　大寺之　餓鬼之後爾　額衝如

三六三　橘　寺之長屋爾　吾率宿之　童女波奈理波　髪上都良武可

三八四〇　寺〻之　女餓鬼申久　大神乃　男餓鬼被レ給而　其子将レ播

と、池田朝臣が大神臣奥守を嗤って歌を詠んだ時、奥守が報え嗤った時に、

三八四一　仏造　真朱不レ足者　水渟　池田乃阿曽我　鼻上乎穿礼

とある。

三八四二　法師等之　贄乃剃杭　馬繋　痛勿引曽　僧半甘

三八四三　檀越也　然勿言　五十戸長我　課役徴者　汝毛半甘

三八四四　波羅門乃　作有流小田乎　喫鳥　睨腫而　幡幢爾居

これらは、単に仏教用語を使用しているだけで、その思想信仰を歌いあげているとはいえない。しかし、仏教用語を使用する意味では、仏教に対してかなりの関心があったといえるであろう。その意味では万葉集に現われたる宗教意識が、ほとんど神の表現であることを考えると、仏教に対しての認識が十分とはいえないまでも、考えに入れておいてよいであろう。原田敏明氏は天地の神という表現について、

信仰といふよりは知的遊戯に属するもので、これが当時の一般社会人の信仰でないことはいふまでもなく、さらに万葉歌人の特殊の大陸的教養の程を示すものといってよい。

と述べられている。古代日本人の知的遊戯であり、大陸的教養とされる理由がわからないので、そのまま許容しがたいが、我が国の古代信仰の中心である神の考え方についても、万葉集中では知的遊戯とみなされるのであるならば、いわんや仏教においても同様に考えられるであろう。しかし、当時において遊戯的なことは、嘲笑にすぐつながるものではないことを注意しておかねばならない。

五、釈教歌の成立

間中富士子氏は千載集の序文によって、釈教歌部立の命名者である藤原俊成の態度がわかり、さらに釈教歌の価値づけに努力した功績は大であるから、その歴史的意義からいって、俊成は特筆される歌人だと言われる。千載集の序文に

そもそも此歌の道をまなふることをいふにから国日のもとのひろきふみのみちもまなひすしかのそのわしの峯のふかき御のりをさとるにしもあらすたゝかなのよそちあまりなゝもしのうちをいてすして心におもふ事を詞にまかせていひつらぬるならひなるかゆへにみそもしあまりひともしをたによみつらねつるものはいつも八雲のそこをしのきしきしまやまとみことのさかひに入過にたりとのみ思へるなるへしかはあれとまことにはきれはいよ〳〵かたくあふけはいよ〳〵高き物は此やまと歌の道になん有けるとある。この序文の意は、間中氏の解によれば、すぐれた歌を詠むためには、和歌の文学に通じ、一方仏法の深い心を悟ることも必要である。何人も触れることの出来なかった法の心を悟る事が、和漢の文学を学ぶと同等に、歌の道においても必要とされるのは、俊成自身の仏教における教養と、その時代及び周囲の仏教に対する関心の深かったことによるのだと述べておられる。今、千載集の釈教の部から数首を引用してみる。

維摩経十喩此身は水の泡のことしといへる心をよみ侍ける　前大納言公任

こゝにきえかしこにむすふ水のあはの浮世にめくる身にこそ有けれ

うかへる雲のことしといへる心を
さためなき身は浮雲によそへつつはてはそらにそなり果ぬへき
法花経薬草喩品の心をよみ侍りける　　僧都源信
おほそらの雨はわきてもそそかねとうるふ草木はをのかさま〳〵
寄レ月念二極楽一といへる心をよみ侍ける　　堀川入道右大臣
いる月を見るとや人はおもふらんこゝろをかけて西にむかへは
提婆品の心をよめる　　僧都覚雅
千とせまてむすひし水も露はかりわか身のためとおもひやはせし
煩悩即菩提の心をよめる　　式子内親王家中将
おもひとく心ひとつになりぬれは氷りも水もへたてさりけり

このような歌から推論すれば、すでに万葉集の時代においても、次の諸歌から釈教歌に向かう何らかの気息を感じることが出来るであろう。

沙弥満誓歌一首

三五一　世間乎　何物爾将レ譬　旦開　榜去師船之　跡無如

移レ朔而後悲二嘆秋風一家持作歌一首

四六五　虚蟬之　代者無レ常跡　知物乎　秋風寒　思努妣都流可聞

大宰師大伴卿報二凶問一歌一首

七九三　余能奈可波　牟奈之伎母乃等　志流等伎子　伊与余麻須万須

加奈之可利家理

これらの歌に人生の淋しい、はかない無常が詠まれている。七九三番歌には悲哀感が表われているし、三五一番歌の沙弥満誓の歌には、表面的には悲哀感がないが底を流れるものに相当仏教的な無常観が感じられる。このように無常思想が万葉集に表現されるによって、最も顕著に悲哀があらわれるものを釈教歌とみなしてよいと思う。中でも、山上憶良が集中最も仏教的色彩を受けていることに異論がないであろう。巻五に憶良の日本挽歌とその序があるが、歌には仏教的色彩はないが、序には多くの影響を示している。

蓋聞　四生起滅方夢皆空一　三界漂流喩二環不レ息　所以維摩大士在二于方丈一　有レ懐二染疾之患一釈迦能仁坐二於雙林一　無レ免二泥洹之苦故知　二聖至極不レ能レ払二力負之尋至一　三千世界誰能逃二黒闇之捜来一　二鼠競走而度レ目之烏旦飛　四蛇争侵而過レ隙之駒夕走

嗟乎痛哉　紅顔共二三従一長逝　素質与二四徳一永滅　何図　偕老違二於要期一独飛生二於半路一　蘭室屏風徒張　断腸之哀弥痛　枕頭明鏡空懸　染筠之涙逾落泉門一掩　無レ由二再見一　嗚呼哀哉

愛河波浪已先滅　苦海煩悩亦無レ結　従来猒二離此穢土一　本願託二生彼浄刹一

とある。また「思二子等一歌」の序に

釈迦如来金口正説　等思衆生如二羅候羅一　又説　愛無レ過レ子　至極大聖尚有二愛レ子之心一　況乎世間蒼生誰不レ愛レ子乎

とあるのは仏教の知識を歌っている。しかしこれは釈迦の言を引用したにとどまっていて、自分の思想を如実に表現したものではなく、借り物という感じがする。

八九三　世間乎　宇之等夜佐之等　於母倍杼母　飛立可弥都　鳥爾之安良弥婆

八九九　周弖母奈久　苦志久阿礼婆　出波之利　伊奈〻等思騰　許良

爾佐夜利奴

九〇〇　富人能　家能子等能　伎留身奈美　久多志須都良牟　絁綿良
　　波母

九〇三　水沫奈須　微命母　栲縄能　千尋爾母何等　慕久良志都

これらの歌から厭世思想をうかがうことが出来る。憶良の作品だけでなく、厭世思想のうかがえる作品は他にもある。巻十六の「厭二世間無常一歌二首」がそれである。

三八四九　生死之　二海乎　厭見　潮干乃山乎　之努比鶴鴨

三八五〇　世間之　繁借虚爾　住〻而　将レ至国之　多附不レ知聞

三八四九番歌の「生死之二海」は法華経に「何能度二生死海一入二仏智海一」とあり、三八五〇番歌の「将至国之」とは、極楽浄土のことで二首とも仏教思想を歌っている。また、この二首では生と死のことが問題となり、現世をきらう気持が歌われている。三八五〇番歌では、世間を仮のものとみて、明らかに無常悲哀観を超越しえているので、釈教歌とみなしてもよいであろう。生と死の観念が、古代においてもかなり意識されていたことは、青木生子氏もすでに述べられている。（昭和四十二年十二月九日、古代文学会）この現世離脱の思想は、未来における理想地として描かれ、来世観として形成されていくのである。この世を仮の世と考え、苦しい世界から離脱する。そこに来世思想が自然生まれてくるのである。

三四八　今代爾之　楽有者　来生者　虫爾鳥爾毛　吾羽成奈武

三四一　現世爾波　人事繁　来生爾毛　将レ相吾背子　今不レ有十方

三八一　生而有者　見巻毛不レ知　何如毛　将レ死与妹常　夢所レ見鶴

などの歌にも、来世思想が感じられる。

憶良の親交のあった大伴家持の歌についてみると

悲二世間無一常歌

四一六〇　天地之　遠始欲　俗中波　常無毛能等　語続　奈我良倍伎多
　　礼　天原　振左気見婆　照月毛　盈具之家里　安之比奇能
　　山之木末毛　春去婆　花開爾保比　秋都気婆　露霜負而　風
　　交　毛美知落家利　宇都勢美母　如是能未奈良之　紅能　伊
　　呂母宇都呂比　奴婆多麻能　黒髪変　朝之咲　暮加波良比
　　吹風能　見要奴我其登久　逝水能　登麻良奴其等久　常毛奈
　　久　宇都呂布見者　爾波多豆美　流涕　等騰米可禰都母
　　言等波奴　木尚春開　秋都気婆　毛美知遅良久波　常乎奈美
　　許曽

四一六三　宇都世美能　常无見者　世間爾　情気受弖　念日曽於保伎

以上三首の歌は、家持の中で注意しなければいけない歌であろう。これらの歌には悲哀感的無常観が明白に詠まれ、人生に対する悲哀にもつながり、仏教的思想の歌として指摘しておかなければならない。同じく家持の「臥レ病悲二無常一欲レ修レ道作歌二首」と「願レ寿作歌一首」に無常観をうかがうことが出来る。

四一六八　宇都世美波　加受奈吉身奈利　夜麻加波乃　佐夜気吉見都〻
　　美知乎多豆禰奈

四一六九　和多流日能　加気爾伎保比弖　多豆禰弖奈　伎欲吉曽能美知
　　末多母安波無多米

四一七〇　美都煩奈須　可礼流身曽等波　之礼〻杼母　奈保之禰我比都
　　知等世能伊乃知乎

これら家持の作品において、俗世間のいやな面を洗い清め、人間の不安を教え、仏教的色彩を強く感じるのである。

六、結び

このようにみてくると無常観の頂点として詠まれる釈教歌は、一時にして成立したものではなく、前期万葉の時代からその進展の跡を見ることができる。単なる仏教用語の使用の時から、現世の離脱、厭世思想、そして人生観、述懐の域に至って、生と死の極限状態の場に接し来世観が生まれる。さらに自然の常住と人間の無常との対立によって、仏教思想が盛んに詠まれる。山上憶良八〇四、八〇五、八九七、九〇二の中で老いていく姿を概念的な形で歌っている。そこに無常観の進展の跡がうかがえるのである。家持は憶良のような素朴な場でもないし、旅人のような悠然なものとも違っている。万葉後期になって、いわば孤独な世界で感傷性のある自然に対して、一人耳を傾ける姿勢をとっている、家持の無常観は、万葉集における頂点でありうる。

以上のように理解することが許されるならば、万葉集においては仏教的色彩がかなり現われており、その意味で釈教歌の源流を認めてもよいのではないかと思う。

萬葉集略解の方法

――巻三の述作をめぐって――

河野頼人

加藤千蔭の「万葉集略解」について荒木田久老は栗田土満宛書簡（寛政八年十月四日）に、

「江戸千蔭子万葉考五冊出板いたし候由本居氏より被申聞候。肥後の長瀬真幸と申仁に承り候処千蔭者先師校合書入本を所持いたし居申夫江本居翁の説を加註し候而已に而珍説も無之由承り申候。愚考とは大きに違可申と存居申候故三ノ巻出板いたしかゝり申候）（『荒木田久老歌文集並伝記』四三七・八頁）

という。この中で賀茂真淵の校合書入本をもとに本居宣長の説を加えて成ったことをいっているのであるが、中村幸彦博士は、「真淵の万葉考を後に刊行した、そして千蔭に接近もして居た真幸の咄は略解の現姿からしても事実であらう。」（「久老の放誕」、「国語国文」十三の九、七一頁）といわれている。又、後年のものであるが「信濃漫録」（享和元年）に、

「近ころ略解といふものに或人の説とて山鳥の尾呂の鏡とは山鳥の尾に光あるをいひて下の刀奈希倍美（ママ）はとらふ（捕）べみの誤にて山鳥の尾の末の光を見せて人をたぶらかすといふといへるはい